

「おじいちゃん」。検査・診察を楽しむ

川口幸宏

…これはかれこれ10年前のお話であります…。

入院1か月以内に検査を受けることというので、今日検査を受けに行った。一日がかりになるに違いないと思い、カレー味のコロッケを挟んだパンとコーヒーで朝食、PCを少しいじってから家を出た。お茶の水で早い昼食をと吉野家で豚丼。あまり食が進まないのは当たり前だが、病院に入ると食べられないと自身に言い聞かせ、無理矢理平らげる。実は病院玄関横にレストランとスタバがあるのだがいつも行列のため、診察の順番待ちの間にちょっと来る、という雰囲気ではないのだ。

診察券をカード機に入れ「検査」のパネルを押す。そして診察受付へ。ぼくの顔を覚えてくれたのだろう、比較的大きな声で、「この前でお待ち下さいね、おじいちゃん」と言われる。うーん、前回までには「おじいちゃん」という言葉はなかったのだが、今日は、この受付に始まり最後まで「おじいちゃん」がついて回った。最初の「おじいちゃん」の言葉で、ぼくが「おじいちゃん」を強調して演じたせいもあるのだろうけれど。「おじいちゃん」の言葉の後、「はい、よく聞こえました。分かりましたよ、ありがとうございます。」とゆっくりしゃべる、しかも耳に手を当てて。間違いなく「おじいちゃん」になりきれ。このぐらいの楽しみがなきゃ、何が面白くて、病院か、と言いたいですねえ。

最初は診察室へ通された。今日は丸めの女医さん。ゆっくりと「私は耳が遠いので、ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願いいたします。」この挨拶で女医さん、それまでふんぞり返るような様子を見せていたけれど、腰をかがめてぼくの間を見ながら、ゆっくりと語りかけてくれた。さっそく「おじいちゃん効果」が現れた。よしよし。「で、どこが具合悪いの？」（内言：あの一ですね。入院前検査ということなんですが・・・）女医さん、女性看護師さんに耳打ちされて、「ああ、手術ね。今日は、いろいろと検査をしていただきますね。検査の順番は後でお教えします。その前に、この書類に署名をしていただきます。血液検査、輸血等でウィルスにかかることはまずないのですけれどね。」要するに、手術で予期せぬ感染があった場合には訴えません、というような内容。笑いながら、「これ、サインしないと、だめですか？」、「だめですねえ。手術が受けられません。」「それはラッキーです。」にこやかな笑みが消え、厳しい表情で、「おじいちゃん！手術受けなきゃ

だめですよ。」「はいはい。承知しております。」ペーパーは2枚。既往症、アレルギーについての質問が2枚目。これ、初診の時に書いたはずだけど、まあいいや・・・。「風邪で医者から投薬されたクスリでアレルギーが出ましたか?という設問ですけど、風邪では医者にかからないので、分かりませんが・・・」「それはいいことです。」向こうもこちらのリズムに合わせるようになってきたわい、と思った所で、はい、おしまい。つまんなーい。

つづいて採血。前回、前々回と同じ、カワイーイ女性看護師さん。「おじいちゃん。今日はたくさん採血しますよ。」「血の気が多いからどんどん抜いてね。」「おじいちゃん、血の気が多いの?でも、その血は抜きません。」一本とられましたな。「おじいちゃん、痛くないからね、大丈夫だからね。」「はい。でも、前、騒いだ?私。」「(笑いながら)少しね。何だって吸血鬼ばかりなんだ、病院は、って。」「看護婦さん・・・ごめん、看護師さんだった・・・看護師さんは鬼ではありません。でも、仏じゃないけど。」こんな会話をしている間に、5種類の容器に血が吸い取られていく。どんな検査のためなのでしょうねえ。「はい、採血はこれでおしまい。この後検尿です。トイレに行って採尿して容器をトイレのボックスに入れて下さいね。それから、地下1階に行って呼吸器検査です。肺活量とか・・・」「ぼくね、あそこ嫌い。」「どうしてです?」「こわい」「こわいんですか?」「そう。お婆ちゃん、元気よすぎるの。『はい、息を吸って、まだまだまだまだまだまだ。はい、息を吐いて、思いつきね、まだまだまだまだまだまだ』」看護師さん大笑い。「でも、行って下さいね。それが終わったら、レントゲンです。そして、心電図。」「レントゲンは、前とったし、先日は輪切りもしたけれど、また?」「前とったのは8月でしょ?入院前には新しいデータが必要なのよ。」「はい、分かりました。では、行ってきます。」「(笑いながら)逃げ出しちゃだめですよ、おじいちゃん。」「(笑いながら)ここは逃げ出します。」

元気のいい呼吸器検査。身長を測るというので、「8月に計っていただきましたが、そんなに早く身長って変わるものですか?」と「反抗」したのがいけなかった。以前にもまして元気のいい声が、検査室内に響く。「息を思いきり吐いて」「まだまだまだまだまだまだまだまだ」「もう一回やってみましょう。(モニターに映し出された呼吸軌跡を指さして)この曲線が気に入りません。」「まだまだまだまだまだまだまだまだまだ・・・」これで終わりと言ったので「8月にも検査していただいたんですが、肺活量って、そんなに変わるものなのですか?」「おじいちゃん、何言ってんのよお。おじいちゃんぐらいになったら、1日1日が大きいなの。」「(大笑いしながら)明日になったら無呼吸とか」「それは誰でも可能性はあるわね。」「あれれ、哲学話になりますね。このままだと。」「(笑いながら)忙しいからお

相手できないわよ。」「では、失礼します。ありがとうございました。」「おじいちゃん、今度はレントゲンよ。この階だからね。迷わないようにね。」

レントゲン技師の声の小さいのにはまいった。「耳が遠い」と言っているのにてんで聞く耳を持たない。あっちの方が耳が遠いや。「おじいちゃん、補聴器、した方がいいね。」とは帰りの言いぐさ。くそつたれ、補聴器したら、隣のガキの泣きわめく声で頭が割れそうになったんじゃ、待たされている間。

最後は心電図。ここの人も、人の耳のことには無関心。なにやら言っているけれど、さっぱり分からないのでぼけーっと立っていたら、シャツを無理矢理脱がされた。で、上半身はだかでぼけーっと立っていたら、背中をぽんと押されて、小さなベッドに倒された……。やばい光景ですねえ、病院の検査室じゃないですか、密室ですぞ……。なんて、アホを心の中でつぶやきながら、次なる相手の動きを待ち続けた。足にペタ、胸にペタ……。なんだかよく分からない。(大きな声で)「ドキドキしてますか?」…。なんだい、ぼくが耳が遠いって見抜いてんじゃないのさ……。「はい、ドキドキしています。」……。「おじいちゃん、終わりました。検査の結果は担当医から聞いて下さい。」

で、部屋を放り出され、会計へ。

ほぼ正午にすべてが終わった。拍子抜け。でも、心底疲れたなあ。